



ムクゲ

101篇は **ダビデの詩。賛歌** です。2節で **完全な道について解き明かします。** と言っているように、この詩編の主題は「完全な道」と言っていいいでしょう。ダビデは王として、指導者として、民を導きます。その統治が完全であるための内容を吐露しているのではないのでしょうか。

まず、**慈しみと裁きをわたしは歌い／主よ、あなたに向かって、ほめ歌います(1)** とありますように、王として立つ基盤は、民を愛し、公正な裁きを行い、神を愛し、神に従うという二点です。民と神を愛することが、王の最も大切な仕事、すべきこと、目標だということです。

2 連では、神の訪問を熱望している王の姿が登場します。 **いつ、あなたは／わたしを訪れてくださるのでしょうか。わたしは家にあつて／無垢な心をもって行き来します。(2)** と、家にいて、幼子のような純真な心で、待ちわびている様子を率直に述べています。王が日々、心がけて、注意して行動している点、避けている点について明らかにしています。それは **卑しいことを目の前に置かず／背く者の行いを憎み／まつわりつくことを許さず／曲がった心を退け／悪を知ることはありません。／隠れて友をそしる者を滅ぼし／傲慢な目、驕る心を持つ者を許しません。(3-5)** のように、悪とされるすべてのこと(父母を敬わない、殺人、姦淫、盗み、偽証、同胞への貪欲)を卑しいこととして避け、悪を行う者を憎みます。さらに、**隠れて友をそしる 傲慢 驕る** などは、直接的な悪事ではなくても、誹謗中傷、讒言、傲慢という、他者を貶めることや、また、その思いを持っている者でさえも許さないと云います。邪悪は許さず、徹底的な拒否を示しています。

3 連では、対照的に、民のために、王と共に働くにふさわしい、好ましい人々の資質を述べています。 **わたしはこの地の信頼のおける人々に目を留め／わたしと共に座に着かせ／完全な道を歩く人を、わたしに仕えさせます。(6)** それはたった一つの条件で、**完全な道を歩く人** です。王と同じように民と神を愛する人であることです。その人こそ、信頼のおける人であり、王の身近で、その働きを共にすることができるのです。人を見る時、身分、地位、財産、富、学識、健康、容貌など、この世の秤にかけて格付けして、評価してしまいます。けれども **わたし(王)と共に座に着く** という、中枢に立つ指導者には、この高潔さ、邪悪を憎む清廉性が求められるでしょう。詩人は「神と人を愛する」思い、信仰を唯一の条件とし、これこそ「完全な道」と述べています。

そして、付け加えるように、繰り返して **わたしの家においては／人を欺く者を座に着かせず／偽って語る者をわたしの目の前に立たせません。朝ごとに、わたしはこの地の逆らう者を滅ぼし／悪を行う者をことごとく、主の都から断ちます。(7-8)** と、強い決意を述べています。人間には許せない思いがあるのです。それゆえ、人の弱さ、罪深さを憐れまれる主イエスの赦しは圧倒的です。

『讚美歌 21』には 101 篇の関連讚美歌はありません。ジュネーブ詩編歌はオルガンとリコーダーの短い二重奏です。オルガンの静かな流れに乗って、晴朗で、快活なリコーダーが美しい響きを放ちます。 https://www.youtube.com/watch?v=dHDgy_DkQUU&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=101